【公表の参考様式（管理機関用）】　　別添２

令和　５年　６月２９日

令和４年度　特別の教育課程の実施状況等について

滋賀県		
学　校　名	管理機関名	設置者の別
米原市立大原小学校（外　校）	米原市教育委員会	公立

１．学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学　校　名	特別の教育課程の編成の方針等の公表 URL
米原市立大原小学校	https://ohara-e-maibara.edumap.jp/blogs/blog_entries/view/7/432aded67972214fc8b75996b1367164?frame_id=15

※必要に応じて行を追加すること。

２．学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学　校名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
米原市立大原小学校	https://ohara-e-maibara.edumap.jp/blogs/blog_entries/view/7/432aded67972214fc8b75996b1367164?frame_id=15	https://ohara-e-maibara.edumap.jp/blogs/blog_entries/view/7/432aded67972214fc8b75996b1367164?frame_id=15
	https://ohara-e-maibara.edumap.jp/school-blog	

※必要に応じて行を追加すること。

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

⊙計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

（２）実施状況に関する特記事項

※（１）で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

（⊙実施している）

＜特記事項＞

外国語科、英語科に関わる児童の学習状況について、ホームページ上で保護者や地域住民にお知らせするようにしている。また、１年に１度は、学習参観で英語科や外国語科の学習を保護者や学校運営協議会委員に参観していただき、積極的に情報を発信している。

３．　実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

○　英語によるコミュニケーション、特に、英語科の学習において、ＡＬＴと会話ができることは、児童にとって大きな喜びである。また、休み時間には、ＡＬＴと楽しく会話したり、遊んだりして、関わる児童も多い。それら児童の外国籍の人たちと関わろうとする意欲や積極性を十分に認めていくことで、児童の自信につながり、それが自尊感情の高まりにつながっている。

○　英語によるコミュニケーションに対する意欲や積極性は、他の教科において話し合いを深めながら課題を解決していく際に大いに生かされている。英語科での活動はコミュニケーションなくしては成り立たない。ペアでの活動、グループでの活動、全体での活動等、すべてがそうである。英語科の活動は、興味関心がある内容であることはもちろんのこと、ゲーム性のあるものも多く、児童は心から楽しんで会話を行っている。英語科で話し合いの楽しさを感じている児童は、他の教科においても意欲的に話し合いに臨んでおり、そのことが、学力の獲得に大いにつながっている。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

○　英語科の学習に関わって、外国の学校生活や食事、習慣等、外国の文化に対する興味・関心が養われており、ＡＬＴの母国を始め、様々な国について図書室やインターネットで調べていこうとする姿が見られるようになった。

○　令和４年度は、ＡＬＴの母国に住む妹とのビデオレターでの交流により、児童に英語を真剣に学び、相手を意識して自分のことを伝えたいという学びに必然性を持たせた学習ができた。児童の取り組み方にも明らかに違いが見られた。

○ 本学校区には外国籍（主にブラジル籍）の住民が住んでおり、本校においても数多くの外国籍児童が在籍している。児童の外国の文化に対する関心の高まりとともに、外国籍児童との関係、交流が親密なものになってきている。

○ 外国文化と自国文化を比較することから、自国文化への関心、ふるさとへの関心も生まれてきている。

○ 今後の課題としては、異文化理解を一歩進め、よさやちがいを認めていく姿勢や心情を培っていく必要がある。それにつれて、日本人児童と外国籍児童との関係の中で、お互いを「尊敬」していく心情が生まれていくことも期待している。

４．課題の改善のための取組の方向性

○　意欲を持って取り組める必然性のある学習過程の創造

・児童自身がやってみたい、話してみたいという意欲の高まりが見られる学習過程にしていく必要がある。本校において実践した「自分だけの時間割をつくる」「旅行社になっておすすめの国を紹介する」活動では、児童は高い意欲をもって活動することができた。これは、設定した活動の条件が児童のニーズ、発達段階に合っていたからだと考える。また、学んだことを生かせる場を設定していくことも大切である。これまでの学習をもとに、オンラインやビデオレター等で海外の学校や児童生徒と交流し、実際に自分の話す英語が相手に伝わることを通して、児童の意欲を高めていきたい。

・また、中学校との小中連携を進めていく中で、上記のことを踏まえ、指導方法を共有していくことが大切であると考える。意欲を持って学べる場を、発達段階に応じて準備していく必要がある。

○　異文化理解を育む指導の工夫

・日本人児童と外国籍児童、外国籍の方々との関係の中で、よさやちがいを認めていく姿勢や心を培っていく必要がある。お互いを「尊敬」していく心情にまで高めていくことも期待してのことである。そのためには、英語科の学習だけでなく、道徳の学習、学級活動等と合わせて、総合単元的に進めていき、心情を培っていくことが大切である。

・児童会活動やたてわり活動の中で、外国籍の児童も含めて、協力して一つのことを成し遂げる活動を設定する。そのことは、お互いを知るとともに、認め合える場を提供していくことになると考える。